国語学習記録作成上の諸課題

――「さまざまな質問に答える」（昭和五九年）を手がかりにして――

前田眞證

はじめに

大村はま国語教室第一二巻『国語学習記録の指導』[1]を公にする際に新たに書き下ろした「さまざまな質問に答える」には、「三」として国語学習記録作成上の諸課題と言うべき九項目が挙がっている。あまりに実践的な配慮がなされており、研究としてはあえて取り上げなくてもよいようにも見える。しかし、大村はま氏は、これらの問題（問21～問29）についても、先の

一　国語学習記録の原理（問1～問11）
二　国語学習記録の指導の組織化（問12～問20）

と同じように、おろそかにしないで懇切に答えられている。そこで、本稿ではこの部分を対象にして考察し、そこにどのような実践研究者としての英知がこめられているかを明らかにしたい。

一　国語学習記録として綴じにくいものへの対策

問21（なんでも綴じ込むということでしたが、綴じにくいものはどうしますか。習字の〔作品〕や、ペン習字で書いたの〔がある〕でしょう、「しおり」とか、それからカードとか。）は、国語学習記録の中にはさむもので清書したもの、穴をあけるのにふさわしくないもの、大きさがけい紙や原稿用紙、配付資料などとは違うものはどうするのかという問いである。これについて、大村はま氏は答えられている。箇条書きにし、敬体を常体に改めて引用する。

①たいていのものは、クリップテープをつかっている。これだと、清書したものでも、作品に穴をあけずに綴じ込める。
②しおりは、白紙にひものところをセロテープで貼って、その白紙に穴をあけて入れる。
③カードは、角封筒の4号や7号に入れ、その角封筒をクリップテープで入れる。

めんどうのようだが、こういうことは子どもたちは好きであった。クリップテープなどは特に好きである。[2]

〈考察〉

1　習字やペン習字で仕上げた作品を傷つけないために

①は、ふつうの綴じ方がふさわしくない大多数のもの（当然清書したものなど、作品として仕上げられ、紙質の違うものが多くなる）を守るための方策である。クリップテープは、穴があいていてそれが作品の端にくっつき、綴じ込むことが可能になるもの（長崎大学鈴木慶子氏が業者に問い合わせて下さって判明したこと）のようで、けい紙の半紙判に合えばそこにおさまるわけである。クリップテープをつけた分だけはみ出せば、作品の大切さに応じて折るなり、③のふさわしい角封筒に入れるなりする手間が加わることになる。

これらは、国語学習において余分な手間に見えるが、大村はま氏は子どもたちは好きであったと言われている。苦労して書き上げた清書をきちんと国語学習記録の綴じ穴にとまるようにするのは、国語学習を締めくくることである。けい紙よりはみ出した成績物をなんとか工夫して入れようとするのは、学び手として自然ににじみ出てくる対象へのいとおしみなのである。これらの手間を手間と思わなくなって、やっと国語学習を積み上げる喜びがわかってきたとも言えよう。大村はま氏の「こういうことは子どもたちは好きであった」という述懐には、この営みは確かに国語学習と言えるという手応えが感じられる。

なお、「クリップテープなどは特に好き」とあるのは、貼り方に慎重さが求められ、緊張を要するだけに、これから仕上げる作品が大切だという思いが湧いてくるためであろう。

2　大きさの異なる作品・蓄積したものを大切に扱うために

②のしおりは、小さく、ひもの部分と本体とがあるから厄介である。大村はま氏は、これも作品として残すために、白紙にひものところをセロテープで止め、そのけい紙と同じ大きさの白紙に穴をあけて入れるとしている。これで、しおりとしてはもう使えないが、作品として際立ち、国語学習記録の一ページを飾ることになる。

③のカードは、かなりの大きさがあり、後で一まとまりのものとして取り出して見たり、活用したりする余地のあるものであろう。その時は、カードをまとめて入れられる角封筒の4号（縦二六七ミリ、横一九七ミリ）や7号（縦二〇五ミリ、横一四二ミリ）に収め、その角封筒の口をクリップテープで止めるというのであろう。二重の作業になるが、カードはそのまま温存されるため、きちんと残したいという思いの湧くものになったのである。クリップテープはいろんなところに使われるが、そのことに手慣れることが国語学習記録を仕上げているという思いにつながり、一層使うのが好きにもなるのである。

二　綴じ込み表紙とひもに固執するという見解を払拭

問22（この綴じ込み表紙、ちょっと古風ですね。いちいちひもを通すところなんか。バインダーがいろいろ出ていると思いますが、

そういう新しいのは使わないことになっているのですか。）は、すでに綴じ込み表紙とひもの役割とを一体化したバインダーができているのに、そういう新しく便利なものは使わないことにして、時代遅れの古いやり方に固執するのかという批判である。これについては、下記のように答えられている。これも見出しをつけ、叙述の順に整理して掲げておく。

A大村はま氏の予備知識・試行

（a）ひもではなく、パチンとワンタッチでとじられるのとか、（新しいバインダーの種類は）いろいろある。

（b）ひもの先が痛んで通しにくくなるので、金具やプラスチック製の（方）がいいかと思ったこともある。

（c）一時、そういうのを使ったこともある。

B新しい文具の問題点…（パチンとワンタッチでとじられる金属製やプラスチック製のものは）どれかを取り出す時に、全部が一度にバラッとはずれてしまったりして、案外不便である。

Cなぜこのようになるかの解明

（a）とじ込んでいくものか、始終出し入れするものか…そういうバインダーは、だんだんとじ込んでいくようにできていて、私たちの学習記録のように、始終出し入れしないもののようである。

（b）厚さの問題…（私たちの国語学習記録は）非常に厚くなるので、（決まった厚さしかない、バインダーには）入らなくなる。[3]

〈考察〉

1　大村はま氏の進取性・実験性（Aに即したところ）

以上の答えを見るだけで、大村はま氏が文房具については新しいものについてもかなりの知識を持ち（（a）と照応）、良いものが出れば使おうという進取の気性を持ち（（b）と照応）、実際に試行する面も持っていたこと（（c）と照応）が知られる。実際に、「国語教室の小さな知恵」[4]の講演でわかるように文房具に関しては特別に深い関心を持ち、最も詳しい方と言ってよいほどの見識を持っている人である。したがって、大村はま氏が綴じ込み表紙とひもを用いるのが、古いやり方に執着するような固定的観念でないことは明らかである。

2　実際に新しい文具を国語学習記録として使用して見出した問題点（Bに即して）

ここでは、表紙として用いる時の課題（背表紙に題を書くところが決められているため棚に並べている時にはこれとすぐ見つけて取り出しやすいが、机上に出していつも使う際には表題が見えにくいという問題点）は挙がっていない。端的に、パチンとワンタッチでとじられるバインダーの長所が、国語学習記録として用い、必要に応じて取り出そうとする時、全部が一度外れるという短所にもなることだけが、指摘されている。それだけでも、当然、用が済んでしまおうとする時、また同じことが起こる懸念が出てくる。そうすると、新しいバインダーの導入が、国語学習記録の始終出し入れをするという本来の使い方を妨げるという事態を引き起こしてしまうのである。

また、Cの（b）に取り上げた、バインダーがどのぐらいの厚さになるものかを特定して作成されている点も、国語学習記録を仕上げる際には、致命傷になってくる。大村はま氏の時代にはまだ、バインダーの厚さがある程度（三センチ幅ぐらい）に限られていたようで、大村国語教室で昭和四〇年代～昭和五〇年代作られる学習記録の驚くべき分厚さは収まりきれなくなることのみが記されている。現実には、でき上がる国語学習記録は時によって分厚さもおりおりに違い、たとえかなりの厚さがあるバインダーができても、その場その場に応じる自在さはなく、やはり分量的に入らなくなったり、反対に書いた分量の方が幾分少なくてすき間ができたりするのである。バインダーを使おうとすれば、国語学習記録に存分に書き加えることができなかったり、教師の方で学習すべき内容を制限したりせざるを得ないという逆転現象が、ここでも生じてしまうのである。

3　バインダーと照らし合わせて見えてくる国語学習記録の特性

国語学習記録の豊かさはきりがなく、いかなる特性があるかはとらえにくい。しかし、固定したノートと比べて順序を固定せず、加除自在なルーズリーフ方式の国語学習記録のよさが見えてきたように、バインダーを一旦使用してみると、かえって大村はま氏の教室で用いる国語学習記録の特性が浮かび上がってくる。バインダーは、本来できた資料を順にとじ込んでいくようにできていて、見る時にも、いつもどういう資料が作られたか確認できれば済むもので、特別に取り出すのは例外的である。しかし、大村はま氏の教室では、国語学習記録は始終出し入れして、いつでも特定のページを取り出して活用し得るところにそのよさが出てくるものなのである。

一方、バインダーは厚さが決まっていて、同じ厚さのものが本棚に並んで整理しやすい。収納空間に合うように作られたもので、このバインダーに入らなければ、次のバインダーに入れれば済む。ところが、国語学習記録は、単元ごとに厚さも違い、しかも生徒が厚くなることを喜び、年代が後になればなるほど分厚さを増していくものであった。そして学習者がいくらでも書き加えることが可能である。そこが、生徒の意欲を引き出し、「これだけの厚さの国語学習記録を作り上げることができた。」という達成感に直結するものであった。当然、いくら分量が多くなっても、生徒にとっては、この本に収められるから意味があるという必然的な結びつきを感じており、自分で題名まで考え出した特定の国語学習記録に収められるほかないものである。

こうして見てくると、バインダーで綴じ込むものと、国語学習記録に入れ、出し入れを自由にして、目いっぱい活用し、分量も制限しないで一枚一枚積み上げて、自己の本を作り上げていく喜びを味わうものとは、明らかに使用目的の異なるものなのである。

三　普通の糊で固めた綴じひもをたびたび取り換えることの合理性・愛着性

問23（ひもはたびたび取り換えるのですか。）は、綴じひもは、もともと消耗品であり、出し入れを始終するのならよけいにひもで大部なものを外したり、また結びつけたりすることが多くなり、何度も取り換えることが億劫になるはずだが…という思いを込めたもの

であろう。これに対する答えも、小見出しをつけ、記号をつけて整理すれば、左のようになる。

Aどういう時にひもを取り換えるか
（a）切れたら、むろん取り換える。
（b）切れなくても、先がくたびれて通しにくくなっても取り換える。

Bとじひもの先が金属になったものの問題点
（a）先が金属になったひもはいたまなくてよさそうだが、実際に使って見ると、引っかかったり金具だけが抜けたりして案外よくない。
（b）会社などで綴じ込んだまま保存するためには綴じやすくてたいへんよいのであろう。しかし、国語学習記録のように、保存が目あてでなく、使い方の烈しいものには合わない。

C行き着いた結論…結局、ごく普通の、先を糊で固めた綴じひもをたびたび取り換えて使うのがいちばん便利であった。[5]

〈考察〉

1　無理をして使い続けることはしない（Aと照応）

大村教室は（a）のように、切れたものをつないで、途中に結ぶことができてもなんとか我慢して使うことをしないばかりではない。（b）のように「先はくたびれて通しにくくなっても」新しいひもと交換するのである。通しに穴をあけた用紙を貫くことがしにくいと思えば、いつでも換えさせることになる。そこに生徒からすれば、私たちの判断を尊重してもらっている思いが生まれ、新しいひもで、また何回でも出し入れしようと意欲が湧いてくるのであろう。むろん、この（a）・（b）の判断は合理的でもあるが、学習者の国語学習記録作成上のわずらわしさを少しでもなくし、意欲を持続させようという大村はま氏の願いが根底にあったと見られる。

2　綴じひもの先が金属になったものも使ってみて長短を見きわめる（Bと対応）

ここでも、実際に使って見て、綴じひもの先がのりで固めてあるものとどちらがよいか確かめている。大村はま氏の実験性が光るところである。先が金属になっているひもは、糊で固めたものよりよさそうだが、実地に使ってみると、（a）にあるように穴の部分で綴じてある用紙に引っかかったり、金具だけが抜けたりして役に立たなかったりするというのである。金具であることの弊害が出て来たり、ひもと金属との接続部分がうまく行かなかったりするのであろう。全体の印象としては「案外よくない」ということになる。これには、使ってみた生徒の実感も反映していよう。

この綴じひもの先が金属になったものの使い道も、（b）に指摘されたように、会社などで一度綴じ込んだまま保存するのには向いていないのである。

3　これまでずっと使われてきた綴じひもをどんどん取り換えることの有効性を再確認（Cと対応）

金具がついたものは余分なものがついていただけで、今まで使用されてきた先を糊で固めたものの方が、通りにくくなり、ひもをたびたび換えないといけないという手間があっても、まだ一番便利だ

と言われている。この合理性と、たびたび新しいひもに取り換えることで、改めて国語学習記録に対する愛着をもって積み上げていこうとする思いを強めていこうとしているのであろう。この国語学習記録への愛着性を強めることについては、直接言及されているわけではないが、この「三」（問21～問29）に掲げられた諸課題を貫いてにじみ出てくることである。

四　綴じ込み表紙にラベルを貼ることの意義

問24（綴じ込み表紙に貼ってあるラベルはなんですか。）については、引用を省き、考察のみを掲げる。

1　最初から緊張感を持って国語学習記録の表紙づくりに臨ませる

ここで言う綴じ込み表紙は、最終的に編集する時の自分で題をつけたり、カットを添えたりする表紙ではなく、それまでにずっと散逸を防ぐために用いる表紙のことであろう。それにしても、目的は国語学習記録の「名前などを書くため」であることは確かであり、他の人のとまぎれることなく、自らの国語教室にかかわる営為をまるごと残すことができればそれでよいのである。それをラベルを貼るという形にしたのは、黒一面で、ここに直接書きようがないという側面も否めないが、文字を丁寧に、しかもまわりを空けて書き、何種類ものラベルを貼り直しのできない場で一回でしかるべき位置に貼らなければという、緊張感をもって臨ませるためである。それを「入学したばかりで落ち着かないときに、ちょうどよい作業」と言われるのであろう。それは、めいめいの国語学習記録を、以後心を込めて書き進めていく契機になるものでもあった。

2　まず、どんな材料によって何をするかを明示

実際の授業では、配布したものを確かめ、学年・組・番号も含めて名前を書くという目的が明確にされている。ただし、それより以前にどういうものに名前を書くのかということは言われていないようである。したがって、中学一年になって、最初の時間に、綴じ込み表紙一組みと綴じひも一本が配られ、何か国語の授業に深く結びつくものの表紙をこれから作っていくのだという予測はついても、何に名前を書くのかと思いながら、以下の教師の説明を待つことになる。

なお、どの材料も失敗が許されないように必要なもの数だけしか配られていない。

3　次に、ラベルを貼る難しさを説き、「国語学習記録」を例に書く字の大きさ・並べ方を理解させる

続いて、綴じ込み表紙に、三種類、四枚のラベルを用心して、いずれも一度できれいに貼らなければならないとしている。その上で、字はグループの文具箱にあるサインペンで書くこと、字を書いて貼るか、貼って書くかは選んでよいこと、字の大きさとしては、回りを少し空けた方が書かれていることがまとまって見えること、国語学習記録という六字が均衡を失しないように位置のとり方を考えて書くことが勧められている。

ここで、初めて国語学習記録ということがわかり、この用語が一まとまりのものとして印象づけられるのである。

なお、生徒には緊張して聞くことが続いたため、ここで一分間の休憩を取っている。

4　さらに、四枚のラベルのどれに何を書くのかを大きい順に話し、確認し、見本によって視覚的にも目に焼き付けた上で、黙って手早く仕上げさせる

休憩後、三種類、四枚のラベルのどれに何を書くのかを、一層明確に生徒の頭に刻みつけようとする。生徒が手に取って綴じ込み表紙の上に置いてみる時間を確保しながら、最も大きいラベルに題として国語学習記録と書くのだと、二度口に出してわかるようにする。次に大きい二枚のラベルに、学年・組と姓名を書くことを告げる。結局、一枚は一年B組と書くことも、さり気なく二回言い方を変えて触れている。最も小さくて円いラベルに算用数字で名簿番号を書くことも、短く二文に切って印象づけている。

しかも、おさらいの時間を三〇秒設け、どの大きさのラベルにどういうことを書くのか、心でつぶやくような間を取る。その後の貼り方の見本を目に覚えさせるのも、姓名以外の国語学習記録、一年B組、何番と、例示されたもので、三たび迷わないようにさせようとしているゆえであろう。その上で、黙って手早くと条件をつけられるため、新入生は安心しても油断せずに、孜々と取り組んだことであろう。

五　配布資料にわざわざ穴をあけて渡す有効性

問25（プリントなどには、穴をあけて渡されるのですか。）には、大村はま氏は、最初のころ（電動パンチを持つ前）はそういうわけにはいかなかったが、その後は穴をあけて渡していることを肯定される。その上で記されていることに、見出しをつけて整理すれば、次のようになろう。

Aどうやって使っていたのか

（a）電動パンチを持ってからも、なかなか少しの狂いもなく正確にあけることは難しくて、二つ折りにしてみると、ずれていたりした。

（b）それを各グループに一箇の文具箱のパッチで修正してとじる、というようなことがあった。

Bそれでも役に立ったところ

（a）たいていは、少しずれていても、綴じひもの通る大きさくらいは一致していて、〔すぐにそろえるのに〕役に立った。

（b）〔綴じ穴の破れを直す〕パッチであけ直すにしても、〔中心は合っているため〕位置は測ってきめる必要がないので役に立っていたようだった。[6]（山括弧は引用者の補い。）

〈考察〉

Aが実際にどんなふうにしていたかである。そのうち、（a）が教師のしたこととその結果、（b）がその上学習者が補ったことである。そして、Bがどこが国語学習記録の作成に有用だったかという二点である。

電動パンチを自費で購入すること自体、なかなかできることでは

ない。大村はま氏が並並ならぬ決意で臨んだことが明らかである。そして、教師がどの配布資料も穴をあけて渡してくださることに、生徒は大村はま氏の生徒への愛情、そして生徒が今から作り上げる国語学習記録へのいとおしみを感じ、嬉しくなるのである。このことは、当然のこととして記されていないのであろうが、配布資料にわざわざ穴をあけて渡されるなかに、大村はま氏の国語教育実践の密度が端的に表れているのである。それゆえ、生徒は大村はま先生がそこまでして下さるのかとひそかに感謝し、私達もこの国語学習記録を少しでもよいものにしなければという思いを固めていくのであろう。それで大村はま氏も「どうせ、あけ直しなのに、むだなことをと、ある先生に笑われたこともありましたが」[7]とされながらも、穴をあけて渡す営みを最後まで続けられたのである。

六　文具箱を各班に用意するゆえん

問26（各グループの文具箱とか言われましたが、文房具は、めいめい持っているのではありませんか。）も、考察のみを掲げる。

1　国語学習記録の充実には、必要に応じて文房具がふんだんに使える場が不可欠

大村はま氏の「ゆたかな（国語）学習を展開するには、それなりの道具（文具箱のような）がいる。」というのは、実りの多い授業（学習）とそれを支える場、学習環境との密接不可分な関係を指摘されたものであろう。それに対して、「普通の市販のノートを使うのではなく、この学習記録を作り、まとめていくのには、いろいろの物が必要になる」とあるのは、豊かな国語学習（実りの多い授業）の結果、まとめられる国語学習記録とそれを支える場、学習環境との関係についても、それと同様なことが言えるということになろう。

そして、効用の一点目（①文具箱などいろいろの物が手近にあって、便利に使えることが、どんなにか、学習生活を能率的に、また楽しくする）が、直接的に授業に反映するところであり、効用の二点目（②文具箱などが手近にあって便利に使えることで、学習生活が本格的になる）が、本来的に教師が願っていることになろう。これら二点に言及しておけばそれらは必ず国語学習記録ににじみ出てくる。だから、そのことを三点目にわざわざ挙げられることをしなかったようである。

2　文具箱を用意すると国語学習生活がどのように豊かになるか

上記の文具箱にいつも入っている一一項目について、学習生活がどのように楽しく、本格的になるかを追求している。

文具箱を当番の人が準備することで国語の授業がいよいよ始まるという緊張感を高め、係が片付けることによって、中学生が一仕事終えたという安堵感をおぼえる契機になるのである。重要な役割を果たしていると言えよう。

七　国語学習記録の包括性

問27（このほかに、書き取り帖といったようなものはないんです

か。）は、もっと基礎的な書き取り帖のようなものは用意しないのかという問いである。

これに関しては、これ以上に質問者が予想してているような基礎となるものはないため、「ありません。[8]」と答えられている。入門期の国語学習記録の中に、日々注意すべき漢字、新たに覚えたことばを書く欄も用意されており、この国語学習記録にこそ国語学習のすべてが入り込むのである。

ただし、国語学習記録よりも発展的な読書生活の記録は、独立してあるという。対象とする生活が狭義の国語学習にとどまらないため、別にしているようである。

八　大部になった国語学習記録への対応

問28には、「だいぶ厚くなるというお話ですが、書きにくくありませんか」という懸念が挙がっている。

それに対して、大村はま氏は以下のように答えられる。見やすいように番号を送って記す。

①そのまま書く際には、ひもをゆるめて平らにして使う。
②書いた上で綴じ入れている生徒もいる。
③まとまった分厚な資料（古典のテキスト、クラス全員のあとがき集、作文集など）は、それだけで別冊にする。[9]

〈考察〉

生徒は分厚さを学習を妨げるものとは見なさず、①のようにひもをゆるめ、机の面との落差が生じないように平らにして使うか、②のように罫紙などに書いた上で綴じ入れるかいずれかを選んでいるというのである。教師の方も、大部な資料が生徒の学習を妨げることのないように、③のように、まとまりのあるものは別冊として、独立させていると言われるのである。この点についても配慮が行き届いている。

九　国語学習記録の増補性

問29（何か、ほかのものに書いておいて、提出というとき清書する、ということはありませんか。）について、大村はま氏は、次のように理由を述べている。

①とても（分量も多くて）やりきれないから。
②メモを清書するなどということがまったく意味のないこと（生徒自身がよく）わかっているから。
③記録の中には、ほんとうに自分が読めばよいようなところもあるから。
④作文など、人に見せ、読んでもらうものは、はじめからきれいに書くように心がけているから（改めて清書する必要はない）。

それゆえ、学習記録の評価表の「文字の書き方」のところも、ていねいに書いていなければならないものが、整った形ででき

ていればよいことにしている。

（大村はま氏の見解）清書すること、書き直すことは、別に悪いことではない。

（例）作文なども、書き直していると、読み返してもわからなかったことが気づいたりするので、いいことにはちがいない。

しかし、国語学習記録の清書は、その性質上合わない。もしその暇があったら新しく何か書き加えなさいと、提案する。[10]

〈考察〉

国語学習記録は何よりも日々書くところ、記録性に特色があるため、それを清書すると言うことは、本来的に合わないのである。ただし、そのおりおりに書き漏らしたり、後から見返して、調べてみたいことを見つけたりすることも出てくる。したがって、清書するというきれいに見せることに力を注ぐような非生産的なことはせず、むしろ新しく加える方がよいと提案されるのである。

おわりに

全体を通して、すべてが国語学習に向かうものになっている。大村はま氏が国語学習記録の特質をすみずみまで見抜かれ、どうすれば生徒が国語学習記録の作成・編集に打ち込むことができるかを見通した説述になっている。生徒が国語学習記録の、いずれの点においても、またどの部分にもかけがえないものという思いが湧くように配慮が行き届いており、安心して国語学習記録を仕上げられるものと言えよう。

注

1 大村はま著『国語学習記録の指導』（筑摩書房、昭和五九〈一九八四〉年一月三〇日発行）全五六六ページ。

2 問の部分は、同上書、九七～九八ページ、答は九八ページに収められている。

3 同上書、九八ページ。

4 「国語教室の小さな知恵」（日本国語教育学会第四三回国語教育全国大会、昭和五五〈一九八〇〉年八月一〇日講演）（大村はま国語教室別巻『自伝　実践研究目録』筑摩書房、昭和六〇年〈一九八五〉年三月八日発行、四二一ページに拠る。）には、確か「教師の七つ道具」として文房具をどんなふうに使っていくかという国語教師としての英知が語られた。

また、『教室をいきいきと』二（筑摩書房、昭和六一〈一九八六〉年一月三〇日発行）の「明るい雰囲気をつくる小道具あれこれ」（三三～四九ページ）の中には、以下の証言もある。

書店に通うのと同格に文房具店に通いまして、新しい便利な製品があれば、すぐに教室に取り入れました。一つの新しい話題を生み、新しい作業を生んだこともありました。用紙、カードやラベル、筆記用具、まとめ用具などは、とくにさまざまな種類がありました。それらを目的に合わせて使いこなすことは、国語教室の楽しみや豊かさの一つのもとになっていたと思いま

す。（四五ページ）

5『国語学習記録の指導』九八～九九ページ。

6同上書、一〇一ページ。

7同上。

8同上書、一〇二ページ。

9同上。

10同上書、一〇三ページ。

（福岡教育大学）